

# 幼児と童話



渡辺桂子

「幼児と童話」について思うとき、私はいつも、幼児たちに愛好されている童話、即ち、「三匹の豚」、「狼と七匹の子羊」、赤ずきん、ヘンデルとグレーテル等々の作品について考える。

子ども時代には、私たちも、これらの童話の熱心な愛好者であった。むろん、いまの幼児たちもその通りである。

しかし私たちの幼児時代と、現在とくらべると、たった二十年そこそこの年月の違いであるにもかかわらず、全く今昔の感にたえないような変りようである。

私たちの幼児時代には

——トウゴウサン、トウゴウサン、トウゴウハエライ人、グンカ

ン三笠ノマストノ上デ、高く、ウチフルシンゴウキ……——

と、日の丸の小旗を振り振り過した時代であった。

ところがいまの幼児たちは、おとなたちのデモの行列を見物し、自分たちも、

——ワッショイ、ワッショイ！——と、デモごっこをする時代である。幼稚園における保育の内容もその在り方も、ずい分変わった。まったく烈しい変りようである。

しかしそれにもかかわらず、先にあげた「三匹の豚」や「狼と七匹の子羊」等々の童話は、過去にも現在にも、幼児に愛され、幼児たちの好んで止まないところのものとなって残っている。

私は幼ない人たちと、毎日接して暮す現場の者として、童話に関する理論よりも、童話そのものを大事に思うものであるが、これらの動かない事実について、やはり考えないわけにはいかな

い。  
なぜこれらの童話が、このように幼児の心をとらえ、過去にも現在にも変わらずに愛好されているのだろうか。このことは童話の専門家でなくとも、また心理学者でなくとも、幼児の心になって考えれば、容易にその幾つかの原因を探し当てることが出来るはずである。私は過去に経験した幼児時代と、そして現在接している子どもたちの心になって、それらのことを考えてみた。

そして第一にあげるのは、当然なことながら、その筋立が幼児によく理解出来るということである。実にテーマがはっきりしている。もう少し具体的にいえば、主人公の目的がなんであるか、そしてその目的はどうなった場合に達成されたことになるのか、どうなった時に、この主人公と話を聞く自分自身が満足出来るのか、幼児にはっきり解かっていることである。従って幼児は、少しも迷ったり混乱したりすることなしに話についていくことが出来る。

第二には先にいったテーマにも大いに関係のある話の結末がは

っきりと割り切れていることだと思う。殊にこの結末は、幼児の場合絶対に幼児の心を満足させる結果にならなくてはいけない。そうして幼児に納得のいく幸福感と安定感とを与えることが大切である。

小説と童話のこれは決定的な違いだと、私は思っている。

第三には、話の中の善と悪の対立、強い者と弱い者との対立が、やはり非常にはっきりしていることだと思う。「三匹の豚」の狼と豚、「七匹の子羊」の狼と子羊の対立は、幼児たちに限らない緊張を与えるし、同じく「三匹の豚」の一番小さい豚が「狼と七匹の子羊」の一番小さい羊が、最もかしこく勇気があるということも、幼児に無類の喜びと共感を呼ぶのである。

また第四には、情景や描写が極度に省略されていることである。そのために一層はっきりと浮きぼりされ、話のスピードを高めている。

このように「三匹の豚」や「七匹の子羊」等々の童話が、幼児に限りない共感を呼ぶ原因をあげることが出来る。私は幼児の童話をえらんんだり、そして自分でも童話を創作するとき、常にいまあげてきたような、いくつかの条件を考えあわせ参考にして

まったく、いつまでも変わらずに、子どもの心をとらえてはならないこれらの童話に、私は帽子を脱いでしまっている。

しかし、それだけに不満なのである。

幼児童話といえば、第一にこれらの作品の名前をあげ、むかしもいまも、それだけにたより、それによりかかっていることに、近頃しきりにあせりと、もどかしさを感じるのである。「三匹の豚」や「七匹の子羊」と同じように幼児に迎えられる現代的童話の生まれないことが残念なのである。

そういう考えから、作家は幼児のためにも生活童話を創作している。しかし残念ながら、幼児の心をとらえるものがない。

もともと生活童話に幼児の心をとらえるものがない、幼児の興味を呼ばないというのは、非常に難かしい理由があるのである。生活童話というのは、どこまでも身辺的なことをとらえるために、幼児の緊張感を呼ばないためだと思う。

現実の幼児は決して、三匹の豚のように家を建てることはない。赤ずきんのように狼にであったり、まして狼に食べられてしまうことはないのだから――

そこで生活童話は、どうしてもおもしろくない。この辺に予ど

もたちに迎えられるような作品が生まれない原因があるのではないだろうか。

幼児の生活環境は、日に日に豊かに恵まれてきているのに、童話による精神生活には、少しも進歩や発展がないように思われている、仕方がない。

「三匹の豚」や「七匹の子羊」は、これからも決して子どもたちの心からはなれていくことはないだろうし、子どもたちと共に生き続けることだろう。だが私は、その上になお、幼児たちを幸福にする別な型の幼児童話がほしいのである。

狼もまほう使いも充分にすばらしいが、世の中には、自分のまわり、自分の生活、現実というものがある。幼児といえども、それについて知らねばならないし、そのために私たちは努力をしなければならぬ。

そうしてそれを、幼児の心と、その生活について、もつともよく知っているはずの私たちの手で、真に幼児の心をとらえ、幼児と共に生きる新らしい童話を創りだそうといったら、それはあまりにも生意氣ない分であるだろうか。